芸振

大分県芸術文化振興会議会報

No. 20. 48. 10

発行所・大分市府内町　県教育庁文化課内　芸術文化振興会議事務局
発行人・米　田　貞　一　　編集人・矢　野　朔　雄

日田市の芸術文化施策

畑　　英　次　郎

日田市は、徳川時代に幕府直轄の天領であった関係から京、大阪の文化がいち早く移入され、幕末から明治の初年にかけて、日田文化は豪華絢爛に咲き誇ったものでした。　広瀬淡窓を始祖とする学塾咸宜園もその顕著な一例であるし、全国の文人墨客の当地への来遊もその現れというべきでしょう。しかしながら、その後明治政府の中央集権的な政策と、日本資本主義勃興期のバスに乗り遅れた経済的立ち遅れの影響もあって、芸術文化の面でも可成り長い停滞期があったことは否めない事実であります。今更云うまでもなく文化とは、文明に対する語であって、学問、芸術、教育等の精神的所産を意味するものであるが、これを行政が執り上げて行くことには非常な難しさがあります。

本来行政は、「当為」―在るべき姿―をいかに現実的な「存在」―在る姿に調整統合させるかという本質的な性格をもっています。それにも拘らず、芸術といい文化といい、それは究極の「美」や、「善」を追求するものであるからです。しからば、日田市の芸術文化施策としては何を指向すればよいのかという問題に逢着します。幸い日田市には、先に一寸触れたように、優れた芸術的文化的遺産が多いので、日田市民の血の中には優れた芸術を感得し、高い文化を理解する能力が培われています。広瀬淡窓の詩篇にみられるみずみずしさは、まれにリリシズムの極致といってもよく、それはいまだに日田市民一人一人の胸中に豊かに息づいております。

これらの芸術的文化的感覚を大きく開華させ現代に生かすことが、日田市の芸術文化施策に与えられた究極の目的ではないかと考えております。そのためには、やゝもすれば中央から遠隔の地であるために、素通りし勝ちな真の芸術に触れる機会を出来る限り沢山つくること、そのための充分な施設を整備すること等、芸術文化施策の課題は山積しておりますが、真の郷土の繁栄は芸術文化の裏付けなしにはあり得ないと信じておりますので、今後も全力投球を続けようと思っておる次第であります。

（日田市長）

市町村の文化活動

演劇

演劇活動の

日田市における演劇活動

（劇団 糸車）　中津留　鉄　男

そうですね、見る人は多くても観てくれる人は少ないです。プロの劇団公演にしても、お芝居の良し悪しは抜きにして有名人の俳優が出演する、しないで市民の参集が違います。まして私たちの自主公演においておやです。これが今様の風潮といえ、寂しい限りです。

勿論、問題は創る側にあります。私たちの劇団もサークル的な活動の在り方を求める傾向が強いのです。「趣味を通して人の和を」「心にゆとりを豊かな心を」――こんな標語だけの活動で、どうして観客の心をゆさぶる舞台ができるでしょうか。人の和が演じる者だけの親睦に終り、人間が人間らしい生活を過すために、それを阻害するものを取り除かず、どうして豊かな心が持てるだろう。

いいえ、だからといって私は、サークル活動を否定しようとは思っていません。みんなが集まって何かをやる、こんな素晴しいことはないと思います。ただ私は、サークル活動と創造活動とは区分してやらないと、イラダチ、混乱が大きく生じることを知らされました。もとは同居していたはずのものが、どこでどう変ってきたのか、これも不明確な生き方から来る現われでしょうか。いや、これは私の暴言であってほしい。

それにしても、企業が文化という装飾語を背景にして売りまくる商魂には驚きのほかはない。その製品を利用して作られた余暇？という時間や、コマーシャリズムの波に乗って作られたレジャーという魔語に魅せられ、ややもすれば休日を車やボートやボーリングで潰しても、これがナウな文化だと錯覚していないだろうか。演劇活動もレジャーも同視する今日的なスレスレの現代感覚が、サークル活動をも鈍らせているように思います。

これからはでなく、今も、g 80円のミンチ肉でなく、もっと歯ごたえのある肉が何故たべられないのか？素朴な疑問を大切にした演劇創造活動を、追求してゆく仲間をつくることが私の課題です。

演劇

現状と課題

〝過疎に生きる〟緒方町の劇団「みずぐるま」

菅　沢　活　水

誕生２年目になりました。公演もすでに８回を数えます。第２回発表会は８月４日でした。町もわずかですが予算を計上してくれました。町全体が可愛がって下さるのです。〝頑張ろう〟が合ことばです。レパートリーもふえ「乞食の歌」は町の成人式でも上演し好評を得ました。

団員もふえるばかりです。なぜなら退団者がないのですから。創立時の先輩団員はキャストを新人につけスタッフに意欲をもやしています。照明装置等みちがえるばかり。団員の家族も、のこ、かなづち持参で加勢します。これは又公演の時も同様で開演前の準備受付からハネてからの清掃まで手伝います。ミーティングでも手きびしい批判が投げられますが、温かさをかみしめながら頑張るのです。納得がいくまでやるのです。

人間として成長していかない演劇活動などナンセンスです。その意味でもわれわれは発表という結果より過程を重視します。脚本の掘り起しは勿論、いかに生くべきか、を素通りすることは許されません。

井路を血みどろで築いた祖先の、水に対する感激を追体験し、それを通して過疎の町をみつめるのです。オドロキとウタガイの生活はここから出発します。

更に又われわれは、一つの作品が完成するために、いかに団結と協力が必要であるかを学びます。

今、われわれはわれわれでなければできない作品にとりくんでいます。土をふみしめて立ち、この町の土になろうと決意している若者たちでなければできない創作です。プロでないことがなによりの誇りなのです。

こうして「みずぐるま」はおさない歩みをつづけています。過疎の町に生きていきます。県下の先輩の方々に手をひいていただきたいの願いや切です。

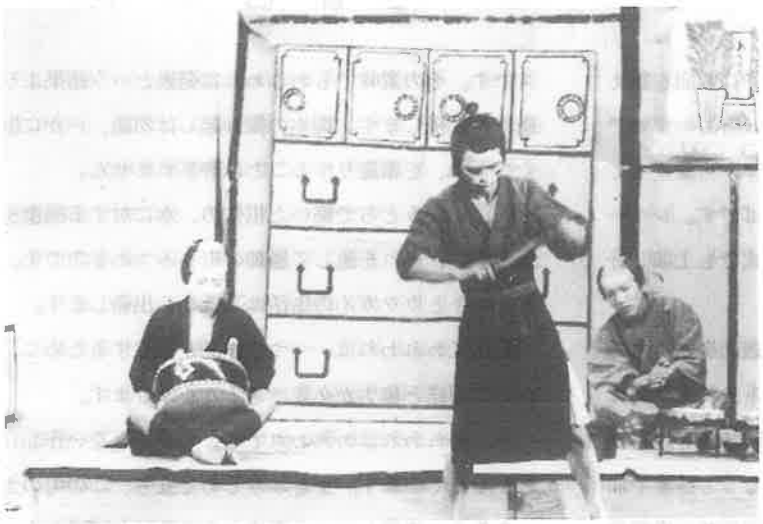
市町村の文化活動

演劇

演劇活動の

臼杵市における演劇活動

東　　政憲



団員全員がつとめから帰り、昼間の疲れも忘れ地元から4キロ離れた臼杵市中央公民館まで出向き午後7時から10時まで3時間の練習を3週間つづけてきました。指導者もおらず団員同志で協議し、自分達自から演技を考えて「吉四六物語」をつくりあげました。これまでは映画やテレビを見て楽しんでいたのが、自分達で演ずる苦しみや楽しみを味わうという方向に転換しているのが現在の情況です。

私達青年団は結成以来3年目を迎え、去る9月8日の県青年大会で見事優勝し、11月6日から始まる全国青年大会出場という輝かしい栄与を手に致しました。これを機会に今後も青年演劇を続けていきたいと決意しております。青年団というと何か古くさい感じにとられますが、団体生活をするうえからも、又社会教育という面からみても、これから生きていく青年にとってなくてはならない団体だと認識しています。

私達の住んでいる郷土も全国的問題になっている過疎という悩みをかかえております。このようなときに何かをやらなければますます若者の流出問題がはげしくなるのではないかと思い、3年前に青年団を結成しました。それからいろいろなことをやりましたが、その都度壁に打ちあたりましたがそれを乗りこえてやってきたことが、今度の全国大会出場を手中に収めたことになったのだと思います。

これからも演劇を青年団活動の一環として取りあげて、地域・社会・文化の向上に役だたせたいと決意しております。

（臼杵市大浜青年団）

漢方薬　相談薬局

大分市中央町2－3－7（若草公園前）
株式会社　ブンゴヤ薬局
TEL ㉜2985

演劇

現状と課題

高校における演劇活動

尾　立　卓　道

高校演劇の活動も、全国的にみて現在一つの転換期に当っていると思う。組織の問題、舞台の内容、脚本の選択、制作等、自分で組織し自らの手で創り出さなければならない。この高校演劇の活動はつらいけれども、あるいは各高校の事情はたとえ違っていても、互いに手をとり合い、励まし合いながら盛りあげていかなければならない。幸いにも本県の場合、高等学校文化連盟という組織が県内高校生の文化活動の基盤をつくっており、その上に現在定着はしているものの余り進歩が見られず、どちらかといえばアグラをかいているのではないかという疑問さえも抱く。

現在高文連演劇部に加盟している高校は県下高校の$\frac{1}{3}$位の28校である。若干の伸びは示しているが多年の懸案である県下全域の底辺の拡大につとめるため、今まで努力してきたが未だしの感がある。本年で第26回を迎える高校中央演劇祭も真に高校教育制度発足の歴史でもある。この演劇祭は自主参加であるが内容的には準コンクールの形式をとっており、形式化されている感がするが実際は、あくまでも競うことではなくお互いの舞台の成果を評価し、交流し検討し合い、より学校教育、クラブ活動の中に生かしていこうというのがその真意である。しかしその前提には夏季休業中を利用して毎年開催している高校演劇講習会がある。県

下より毎年20校、顧問教師、男女生徒約 130名参加、3泊4日間の日程も短い位で、演劇の発声、創作活動、メークアップ、舞台装置、照明、効果、衣裳等実験公演（各校の希望により輪番制）を通して研究を重ねている。その間に学校間の交流も出来、相互間の刺激により意欲も高まりこれが秋に公演される中央演劇祭にその成果が発表されるのである。そして更に県代表校2校が最優勝校として九州大会に出場出来る栄誉を得るわけで昨年度は、本県が開催県で別府市国際観光会館で12月下旬に実施、杵築高校が2位に入賞、惜しくも1位には入賞出来なかったが本年度鹿児島市での九州大会には是非1位になり全国大会に出場させたい気持ちで一杯である。

一般論的にみて演劇を上演する事、上演する者を異端者扱いにする風潮が日本の民度としてある事は大変残念で、私達の生活経験、人生そのものが一つのドラマであって、それを高校生が探究するところに高校演劇の意義、価値が発揮できるものと信じている。現在県内には青年、一般、職場等自立演劇の立場で取組んでいるアマチュアのグループは多いが、演劇活動そのものは低調である。しかし何とかして組織の一元化をはかりお互いに提携していける協議体でも出来たらというはかない夢をいつももっているひとりである。

（大分県立高田高校教諭）

外科・胃腸科
大塚外科医院
医院長 大　塚　正　年
大分市新川バス停横　TEL ㉟1122

県民オペラ「吉四六昇天」によせて

小　長　久　子

去る３月30日に羽田を発ち、私は文部省在外研究員として２ケ月の予定でヨーロッパに向った。まずシュツットガルトに落着き、ここで約１ケ月を過した。大学がまだ春休みであったので、外国での生活に馴れるかたわら、オペラ劇場、音楽会場にせっせと足を運んだ。

シュツットガルトには街の中心部の電車通りをへだて、新旧２つの城があり、新しい城の横にオペラハウスがある。その横には演劇専用の劇場があって一帯は公園になっている。

着いた頃はまだ寒く、みな厚手のオーバーを羽織っていた。それが４月末ウィーンへ発つ頃には公園の樹々は緑の芽をふき、オペラハウスの前庭の池には噴水が上がり、散歩道や池のまわりに灯がともって、タキシードやイブニングを着た紳士、淑女が開演まえなど散歩するようになった。

この劇場で、はじめて観たオペラは「蝶々夫人」である。県民オペラが上演した直後のことであったので、中国とも何ともつかぬ衣裳は珍妙であったが、音楽も芝居も充分楽しめた。

ここではその後「コジ・ファン・トウッテ」「さまよえるオランダ人」を観た。オランダ人の水夫の男性合唱はすさまじいものがあった。舞台の中より奥行きの方が深いと思われる舞台の転換は全く静かで、金槌の音などは少しも聴かれなかった。オーケストラボックスも常時そのままであるから、大分市の文化会館のように、ボックスを掘る苦労など全然ないのを羨ましく思ったことである。シュツットガルト滞在中ミュンヘン、ニュールンベルグ、ハイデルベルグ等を旅行してみたが、ミュンヘンのオペラハウスはドイツを代表するもので室内の豪華さは眼をみはるばかりであった。「フィガロの結婚」をザワリッシュの指揮で観た。

外国でオペラを観て感じたことは、観客の年令層の巾が広いことで、会場の殆どが中年から白髪の老人で埋っており、その人々が心からオペラをたのしんでいることである。ドイツにはテレビが普及してなく、チャンネルも２つか３つくらいのもので、それも夕方５時頃から11時頃まで、主な番組は終ってしまうという。ウィーンもそうだった。生の音楽が、いつでも聴かれるので、あまり必要はないという。夜８時になれば、小さな子供を寝かせ、それからが大人たちの楽しみの時間が始まり、オペラや音楽会に出かける。ロックやジャズなどは殆ど街では聴かれなかった。総べての生活で古いものを非常に大事にしていることが感じられた。

オペラハウスでは毎夜のようにオペラかバレーが上演されている。いつも満員であるのが不思議なくらいである。外国ではどの都市でも国立のオペラ劇場がある。更にコミカルなオペレッタなどを上演する小さい

新築・増築・改造
その他一般工事
設計・施工
中三建設
代表者 中野三平
大分市南春日町13組　TEL ㊸4820

劇場も持っているところもある。劇場では専属の歌手や踊り手が養成され、専属のオーケストラを持っている。シュツットガルトの劇場のディレクターは、かつて日本のフェスティバルで、世界第１級のドイツのソプラノ歌手ニルソンと「トリスタンとイゾルデ」を歌ったヴィーント・ガッセンで歌手の養成、招へいから経営一切まできり盛りしているということであった。又、ワーグナーの孫にあたる演出の鬼才ヴィーンラント・ワーグナーも亡くなるまでここで仕事をしたということである。

このようにしてオペラが連夜上演されていて、経営は赤字にならないのかとある人に尋ねてみたが、勿論赤字だけど、国が補助をしているからどうにかやって行っているのだろう、と答えた。入場料も二千円から七千円くらいのオペラもあるし、指揮者のすぐ後の最高の席で三千円のオペラもある。学生は特別に優遇され、音楽大学の学生証さえ見せれば、どのような席でも空いている時は三百円か五百円くらいで観られる。

ウィーンに移ったのは五月はじめ、シュトラウスの銅像のある公園にはチューリップが一斉に咲き、野外音楽堂ではオーケストラの演奏するウィンナワルツを散歩する人々も足を止めて聴いていた。赤、黄と色とりどりのベンチにはコーヒーを飲みながら音楽をたのしむ人々で一杯であった。やがてむせかえるようにライラックの花が香るのももうすぐだという。そのあとにはバラが咲き競ってウィーンは本当に美しくなるのだという。

ウィーンのオペラハウスでは、世界最高のテノール歌手ドミンゴで「ボェーム」を聴いた。又、日本ではあまり上演されない「ホフマン」も観た。

ベルリンに発ったのは五月半ばであったが、ウィーンでは夏服もみられる暑さであったのに、ここではまだオーヴァーを羽織っていた。「サロメ」の切符がようやく手に入ったので観に行った。ここでもオペラを楽しむ人々で一杯であった。

昭和43年以来「フィガロの結婚」「椿姫」「カバレリア・ルスチカーナ」「蝶々夫人」と地方公演を入れて十数回の公演を重ねてきたが、その地域のオーケストラ共演で毎年つづけているオペラは全国でも珍しく、地方オペラ運動のモデルケースとして注目されるようになった。これも県、市をはじめ報道関係者、県民の方々の援助、声援のおかげだと思い感謝している。又、毎年オペラ教室を町を挙げて実施し、夏の合宿場、大道具その他の装置一切を保管する倉庫を提供して下さっている湯布院町の理解と厚意は県民オペラ発展の大きな力となっている。

地方でオペラをつづけてゆくと、常に中央との格差を感じる。それをなくすためには、地域に根ざしたものを創り上げてゆくことだと思う。今年は古くから大分県の人々に親しまれている民話「吉四六ばなし」をオペラ化10月１日芸術祭の開幕に上演の予定となった。阪田寛夫台本、清水脩作曲、立川清登主演という日本で最高といわれるこれらの方々の協力によって県民オペラが上演できる幸せは言葉では尽くせない。外国人が自国のオペラを心からたのしむと同じように私共は日本のオペラ、しかも郷土のオペラを楽しめるようにしたいものだと思う。

（県民オペラ研究会会長）

ピアノは演奏者の感情をそのまま鍵盤を通して
美しい豊かな音として表現されなくてはなりません。
ピアニシモからフォルティシモまで
巾広い豊かな音を生み出すカワイピアノ
全音域にわたって美しいハーモニーの得られるカワイピアノ
パーフェクトの真の意味をカワイピアノで実感なさってください。

カワイピアノ・オルガン

河合楽器製作所大分営業所
大分市中央町１丁目１番22号
TEL大分0975—34—7007・7009

波紋

県下の演劇活動に望むもの

野呂祐吉（劇団造形劇場主宰）

県下には①専門演劇 ②自立演劇 ③青年演劇 ④高校演劇 ⑤児童演劇の各ジャンルがあり、それぞれに精力的に活動を展開している。

今年の大分県演劇祭には①臼杵青年団「吉四六物語」 ②杵築高校「身投げ石」③造形劇場「吉四六さん」の創作３本が並んだことは、県民演劇の創造から見ると大変結構なことであったが、舞台の出来は、必ずしも感動的なものではなかった。一つには創作上の問題として、創造目標と創作された作品に今一段の芸術的追及が不足していたことと、観客動員の失敗で、劇場的高揚を創り出せなかったことにある。県演劇祭のあり方には、これまでも問題が残されていたもので、これは今後関係者で徹底的に話合って、県民演劇の正しい発展について努力したい。

演劇活動の本道は、各創造集団には、それぞれの創造と普及の課題がある筈で、その目的にそっての公演形態と観客動員の方法があり、それぞれの集団が独自に開拓して行くべきものである。県演劇祭だからと単純に総花的に羅列しても、劇場的感動を創り出せるものとは限らない。

その点、大分労演が「沈んだ島の物語」を上演するのは、大変たのしみにしている。

来年は芸術祭も10周年を迎える。県演劇劇界もオペラ・バレエ・日舞界におくれず、県民演劇の創造を考えていることと信ずる。

然し、演劇界各ジャンルが統一して一作品の創造にとりくむことは、非常にむずかしいことかも知れぬ。然し、県民もそろそろ、期待しているのではないかと思う。早い時期に各ジャンルが集って話合いを持ちたい。それと、取りかえしのつかぬ生（なま）の舞台芸術であるから、一つ一つの上演を大切にして、その成果を確実に積み上げて、茶の間のテレビの前から離れて、劇場に足を運ぶ県民を一人ずつ増すことが肝要であろう。

≪お知らせ≫

▲第９回県芸術祭開幕行事「吉四六昇天」盛会裡に終る

10月１日午後６時30分より第９回県芸術祭開幕行事の県民オペラ「吉四六昇天」の公演が大分文化会館で開催され、立川清登氏以下出演者全員の息の合った熱演で 3,000人近くの観衆を魅了した。

なお県民オペラは次の日程で県下各地を巡回公演します。

11月16日（金） 三 重 町 県立三重農業高校体育館
13：00～

11月18日（日） 野 津 町 野津中学校体育館
13：00～
17：30～

12月２日（日） 湯布院町 （場所未定）

12月16日（日） 宇 佐 市 （場所未定）

▲第９回県芸術祭「閉幕行事」

11月27日午後６時より大分文化会館大ホールにて、県芸術祭の閉幕行事、花柳流・藤間流の合同公演による創作日本舞踊「春夏秋冬」が華やかに開催されます。

芸振会員各位の観覧をぜひおねがいします。

なお入場料は 1,500円です。

あとがき

「芸振」８ページの編集など実際はたいしたことではないのかもしれませんが原稿が集まらないので困ります。

どうか自分たちの「芸振」とお考えのうえぜひご協力をおねがいします。

次号は12月発行、県芸術祭の実績報告を掲載する予定を立てております。 （K）